



基地内文化財 I

～宜野湾市所在米軍基地内埋蔵文化財分布調査概要～

1998年3月

沖縄県教育委員会



宜野湾市内の米軍基地（普天間飛行場とキャンプ瑞慶覧）西方より

普天間飛行場

伊佐三叉路



上原瀧原遺跡 手前：古琉球～近世頃の小穴群、後方：近代～現代の遺構群 [北西方より]



上原瀧原遺跡 突間状溝列検出状況 [東方より]



宜野湾クシヌウタキ遺跡 調査地区の土層断面 [北西方から]



宜野湾クシヌウタキ遺跡 東祠・西祠と1号・2号海砂利敷遺構 [北方から]



喜友名泉の一つカーグー



喜友名泉の一つウフガー

基地内文化財 I

～宜野湾市所在米軍基地内埋蔵文化財分布調査概要～

1998年3月
沖縄県教育委員会

はじめに

沖縄県は「鉄の暴風」が吹き荒れた第二次世界大戦、住民を巻き込んだ激しい地上戦により多くの尊い命が失われ、また、緑豊かな美しい島は激しい爆弾投下や砲撃を浴びて一面焼け野原と化し、先人から受け継いできた数々の貴重な文化遺産がごとく灰燼に帰してしまいました。そして、終戦、サンフランシスコ平和条約による米軍統治、本土復帰と激動の中をくぐり抜けてきた戦後50余年、県土の約11%という広大な土地に米軍基地が横たわり、「基地の島 沖縄」と形容される今日の状況があります。

基地あるがゆえの制約、さらに、そこから派生していく多くの社会現象が今日的な問題となつておらず、そのひとつに基地内に所在する文化財の保護があります。

平成8年1月、勝連町にある米軍基地「ホワイトビーチ地区」内で平敷屋原遺跡が事前協議が行なわれないまま米空軍の気象観測用レーダー建設工事により破壊されるという事件が起こりました。6月には県教育長から在沖米国総領事、那覇防衛施設局長に対して、今後、遺跡破壊が起きないこと、基地内の指定文化財等の適切な保存・管理、開発行為の際の事前調整や文化財の活用が円滑にできるように要請してきました。

他方、1996年12月の日米安全保障協議委員会で「沖縄に関する特別行動委員会」(SACO)の最終報告が承認され、普天間飛行場の全面返還を含む10施設の返還が合意され、また、沖縄県からも「国際都市形成構想」の策定、それに伴う「基地返還アクションプログラム」の提示など、基地をとりまく情勢は加速度をつけたかのように慌ただしく変動しています。

基地返還後の跡地利用が取り沙汰されるようになり、基地内に所在する文化財、とりわけ土地に埋もれている埋蔵文化財の取り扱いがクローズアップされてきました。基地を取り巻く当該市町村教育委員会によるこれまでの埋蔵文化財調査の成果をみると、多くの埋蔵文化財がかなり良好な状態で残っているようあります。

そのため、基地内の埋蔵文化財の分布状況を早急に把握し、県の策定した国際都市形成構想に対応できるようにすることが必要であり、平成9年度から文化庁の補助を得て基地内に所在する埋蔵文化財の実態把握に着手しました。

今回の概報は普天間飛行場とキャンプ瑞慶覧の両基地の現在の状況を紹介します。今後の調査の進展によって埋蔵文化財の数は増加するものと予想しております。本概報が県民はもとより在沖米軍属の多くの方々の基地内文化財の保護に対する意識の高揚へ結びつけ幸いに存じます。

例　　言

1. 本概報は平成9年度から文化庁の補助を受け、沖縄県教育委員会が実施している米軍基地内の埋蔵文化財分布調査の中間報告として宜野湾市にある普天間飛行場、キャンプ瑞慶覧内に所在する埋蔵文化財の概要を記したものである。
2. 本書の作成にあたっては宜野湾市教育委員会の多大な協力(写真や実測図など既刊の報告書からの転載承諾および写真の借用など)を得た。記して感謝申し上げる。
3. 普天間基地内、キャンプ瑞慶覧基地内の遺跡分布図は宜野湾市文化財調査報告書第26集(1997.3)に掲載されている分布図を基に作成した。
4. 分布図と一覧表に付されている遺跡番号は一致している。
5. 本書の執筆は埋蔵文化財係長 大城 慧と島袋 洋が担当し、遺跡の概要については基地内の発掘調査報告書から島袋が要約した。なお、編集は島袋が行った。
6. 表紙の写真は「1964年撮影の宜野湾市全景」を文化課非常勤の長田 剛が複写したものである。
7. 基地内文化財の調査は今後も継続されるので基地内文化財 I の表題にした。

目　　次

はじめに 例　　言

第1章 在沖米軍基地の概要

- 第1節 在沖米軍基地の概要
- 第2節 基地内文化財の状況

第2章 宜野湾市内の米軍基地

- 第1節 宜野湾市の位置と沿革
- 第2節 宜野湾市内の米軍基地

第3章 普天間飛行場内の埋蔵文化財

第4章 キャンプ瑞慶覧内の埋蔵文化財

第5章 おわりに

第1章 在沖米軍基地の概要

第1節 在沖米軍基地の概要

県内に占有する米軍基地は40施設で、面積は24,306ha、専用施設面積は23,519haである（1996年3月31日現在）。施設面積は県土面積の約11%を占め、専用施設面積は在日米軍専用施設面積の約75%を有している。とりわけ沖縄本島では面積の約20%（18市町村）が米軍基地に占められ、他県に比べ基地の密度が極めて高くなっている。また、陸地だけでなく沖縄周辺には29箇所の水域と15箇所の空域が米軍の管理下におかれている。

この広大かつ過密な米軍基地は道路網の整備、計画的な都市づくり、産業用地の確保など沖縄県の振興開発を図る上で大きな制約となっている。また、米軍基地あるがゆえに発生している基地被害は県民の生活に重大な影響を及ぼしている。特に、普天間飛行場基地が市域の中央部を占める宜野湾市や極東一といわれる嘉手納飛行場があり町域の82%強を基地に占有されている嘉手納町においては、住宅地域と接しており、より深刻な問題となっている。

第2節 基地内文化財の状況

県内に所在する基地内には別表に示すように346箇所（米軍基地内332、自衛隊基地14）の文化財が確認されている（平成8年4月現在）。内訳は埋蔵文化財が138箇所、民俗文化財が170箇所、建造物が15箇所、天然記念物が1箇所、その他22箇所となっている（表1）。最も多くの文化財が確認されている基地はキャンプ瑞慶覧で117箇所、次いで普天間飛行場の87箇所であり、両者で米軍基地内で確認されている文化財の60%強を占める。市町村別にみるとキャンプ瑞慶覧の南西側、普天間飛行場のある宜野湾市が174箇所と全体の約半数を有す。北谷町が62箇所、読谷村が30箇所、浦添市が22箇所となっている（表3）。

これら確認されている文化財の保存状況（表2）をみると埋蔵文化財は138箇所の内110箇所は良好な状態にあり、11箇所は半壊、6箇所は全壊、11箇所は保存状態の確認ができないものとなっている。民俗文化財の場合は良好なもの83箇所、半壊のもの10箇所、全壊のもの44箇所、確認できないもの33箇所となっている。建造物の15箇所は良好なもの13箇所、確認できないものの2箇所、天然記念物は良好な状態のようである。全体の60%近い207箇所が良好な保存状態にあり、旧来の地形がほとんど失われている基地内の状況からすれば特筆すべきであろう。

確認されている文化財の数は平成8年4月以降の基地内調査により、その数は増加してきている。特に、基地返還が現実味を帯びてきた宜野湾市や北谷町では返還後の跡地利用計画との兼ね合いもあり埋蔵文化財の分布調査が積極的に実施されている。それにより宜野湾市の普天間飛行場およびキャンプ瑞慶覧基地内、北谷町のキャンプ桑江内の埋蔵文化財の数は増加しているようである。普天間飛行場では12箇所の埋蔵文化財が追加され、44箇所となっている。

このように基地内の文化財調査が進めばその数は増加し、また、保存状態も良好なものが多いものと予想される。今後の基地返還、跡地利用計画との関わりから基地内文化財の状況把握が急がれよう。



第1図 在沖米軍基地の位置

表1. 基地別文化財数

平成8年4月現在

基地名	種別	埋蔵文化財	民俗文化財	建造物	天然記念物	その他	計
1. 航空自衛隊那覇基地	3	5					8
2. 航空自衛隊 那覇高射教育訓練場				1			1
3. 米陸軍那覇港湾施設	2						2
4. 米海兵隊牧港補給基地 (キャンプキンザー)	9	13					22
5. 米海兵隊普天間飛行場	32	35	1			19	87
6. 米海兵隊キャンプ瑞慶覧	54	55	7			1	117
7. 米海兵隊キャンプ桑江	10	10					20
8. 米空軍嘉手納飛行場	9	19	2			2	32
9. 米陸軍貯油施設	1	2					3
10. 米陸軍トライ通信施設	5	6					11
11. 米空軍嘉手納弾薬庫	1	18	2		1		22
12. 米海軍キャンプハンセン	2						2
13. 米海軍 キャンプシュワーブ	1						1
14. 米海兵隊 キャンプコートニー	1						1
15. 米陸軍ホワイトビーチ地区	4	6	1				11
16. 陸上自衛隊勝連分屯地	1	1					2
17. 航空自衛隊知念分屯基地			1				1
18. 米空軍 伊江島補助飛行場	1						1
19. 航空自衛隊 久米島分屯基地	1						1
20. 航空自衛隊 宮古島分屯基地	1						1
計	138	170	15	1	22		346

表2. 基地別文化財の保存状況

平成8年4月現在

基地名	種別 状況	埋蔵文化財 ○△×不明	民俗文化財 ○△×不明	建造物 ○△×不明	天然記念物 ○△×不明	その他 ○△×不明	計
1. 航空自衛隊那覇基地		3	5				8
		3	5				
2. 航空自衛隊 那覇高射教育訓練場				1			1
				1			
3. 米陸軍那覇港湾施設		2					2
		1	1				
4. 米海兵隊牧港補給基地 (キャンプキンザー)		9	13				22
		3 2 2 2	13				
5. 米海兵隊普天間飛行場		32	35	1		19	87
		31 1 13 3 14 5		1		4 5 3 7	
6. 米海兵隊キャンプ瑞慶覧		54	55	7		1	117
		46 5 1 2 17 3 29 6 7				1	
7. 米海兵隊キャンプ桑江		10	10				20
		10	5 2 1 2				
8. 米空軍嘉手納飛行場		9	19	2		2	32
		6 1 2 17 2	2			2	
9. 米陸軍貯油施設		1	2				3
		1	2				
10. 米陸軍トライ通信施設		5	6				11
		5	6				
11. 米空軍嘉手納弾薬庫		1	18	2	1		22
		1	16 1 2 2	1			
12. 米海軍キャンプハンセン		2					2
		2					
13. 米海軍 キャンプシュワーブ		1					1
		1					
14. 米海兵隊 キャンプコートニー		1					1
		1					
15. 米陸軍ホワイトビーチ地区		4	6	1			11
		1 3	6	1			
16. 陸上自衛隊勝連分屯地		1	1				2
		1	1				
17. 航空自衛隊知念分屯基地				1			1
				1			
18. 米空軍 伊江島補助飛行場		1					1
		1					
19. 航空自衛隊 久米島分屯基地		1					1
		1					
20. 航空自衛隊 宮古島分屯基地		1					1
		1					
計		138	170	15	1	22	346
		110 11 6 11 83 10 44 33 13		2 1		6 5 4 7	

※ 保存状況：○=良好 △=半壊 ×=全壊 不明=確認できないもの

表3. 市町村別基地内文化財件数

平成8年4月現在

市町村	種 別	埋藏文化財	民俗文化財	建 造 物	天 然 記念物	そ の 他	計
1. 那 眇 市		5	5	1			11
2. 浦 添 市		9	13				22
3. 宜 野 湾 市		73	74	7		20	174
4. 北 中 城 村			5				5
5. 北 谷 町		29	32	1			62
6. 嘉 手 納 町		2	4	1			7
7. 沖 繩 市		2	8	1	1	2	14
8. 読 谷 村		6	22	2			30
9. 宜 野 座 村		2					2
10. 名 護 市		1					1
11. 具 志 川 市		1					1
12. 勝 連 町		5	7	1			13
13. 佐 敷 町				1			1
14. 伊 江 村		1					1
15. 仲 里 村		1					1
16. 上 野 村		1					1
計		138	170	15	1	22	346

第2章 宜野湾市内の米軍基地

第1節 宜野湾市の位置と沿革

宜野湾市は沖縄本島の西海岸、本島が「く」字状に折れ曲がる南側のつけ根に位置している。西は東シナ海に面しており、北～東～南は北谷町、北中城村、中城村、西原町、浦添市の1市2町2村に接している。県庁所在地の那覇市からは北へ約12km離れている。

本市は略長方形状を呈し、長軸（略南北）が約4.5km、短軸（略東西）が約4kmで、市域の面積は約18km²である。市域面積の約33%を米軍基地が占め（北西側にキャンプ瑞慶覧、中央部に普天間飛行場が位置している）、市民の住居地区はドーナツ状に米軍基地の外縁を歪に廻る。市内を走る道路網も同じように米軍基地の外縁をドーナツ状に廻っており、西側を国道58号が、東側を国道330号が、また、国道を繋ぐように県道30号・34号などの幹線が縦横に走り、沖縄本島の中南部と北部を結ぶ交通の要所となっている。

地形をみると東側から西側へ雛壇状の4つの段丘面からなり、最も低い海岸沿いの沖積低地を除く内陸側の三つの段丘面は大半が石灰岩部層で占められているが、中城村と接する東側の一部には島尻層（クチャと呼ばれる青灰色粘土）群がみられる。段丘の縁には多くの洞穴や湧泉が散在しており、海岸線はゆるやかな曲線を描き、海は珊瑚礁が比較的発達して遠浅をなしている。北谷町と接する北側に普天間川、南接する浦添市との境界に宇地泊川が流れている。

宜野湾市は1671年（寛文11年）に浦添間切から我如古、宜野湾、神山、嘉数、謝名具志川（大山）、大謝名、内みな（字地泊）、喜友名、新城、伊佐の10ヶ村を裂き、中城間切から前普天満（野嵩）、寺普天間（普天間）そして北谷間切から安仁屋をそれぞれ裂き、大川（真志喜）を新設し、14ヶ村をもって設立された。古くから宜野湾は自然条件が備わり、1879年（明治12年）の廃藩置県後、沖縄県庁の支所として中頭郡役所が普天間に新設され、統いて郡教育部会事務所、県立農事試験場等の官公署が設立されるなど本島中部の政治、経済、教育の中心地として活気を呈していた。

今次大戦においては、本市も壊滅的な戦災を被ったが、野嵩部落が奇跡的に焼失を免れて、以南の戦闘地域住民の収容所となり、他の市町村に先んじて戦後処理作業が開始され、1946年（昭和21年）5月1日行政は再び発足した。その後、市域の主要な部分が米軍基地として接收され、基地都市としての性格を強め普天間を中心とした都市化の傾向が著しく、1962年（昭和37年）7月1日に市制が施行され健康都市「宜野湾市」が誕生した。

市制施行後、22年余になる現在、市街地は道路沿いにドーナツ状に発展し、特異な形状を呈している。近年においては、那覇市からスプロールエネルギーをまともに受け、また、沖縄国際大学、琉球大学が移転されるなど、地域開発、住民福祉が着々と進み、教育、住宅地域としての機能が高まり、中南部の機能の一部を担う重要な地域となりつつある。



第2図 宜野湾市の位置



第2節 宜野湾市内の米軍基地

市内の米軍基地は中央部に普天間飛行場、北西部にキャンプ瑞慶覧が位置し、両基地を合わせた面積は市域面積の約33%を占めている。これら米軍基地の周りに住宅地が展開している。特に、住宅地に囲まれた位置にある普天間飛行場から日常的に発生する航空機騒音は、周辺住民の生活環境に少なからず影響をおよぼしている。以下、普天間飛行場、キャンプ瑞慶覧の概略を記す。

1、普天間飛行場 (Futenma Air Station) FAC605

本市のほぼ中央部にあり、483ha（本市の面積の約25%）という広大な広さを囲っている。字野嵩、字喜友名、字新城、字伊佐、字真志喜、字大謝名、字佐真下、字宜野湾などの旧集落をことごとく基地建設の為に、その外側に排除し、巨大な基地を建設した。人や車の流れは基地の周辺を回る形で動いている。東西南北への直線的な計画道が基地によって寸断されている状況で、都市計画にも大きな影響が生じている。

米軍占領以後、宜野湾市の町並は基地の周縁に沿って発展していった。宜野湾市の中枢部を基地が占拠した為に、軍事基地の強化とともに爆音、物資の落下事故等の事故が相次ぐなど、基地弊害も受けている。

昭和20年に滑走路が建設され、順次拡張され現在2800mの滑走路を使用している。昭和35年に陸軍から海兵隊に移管され、航空隊基地として管理運営されている。昭和47年には普天間海兵隊飛行場、普天間陸軍補助施設、普天間海兵隊飛行場通信所が統合され、普天間飛行場として提供施設となっている。

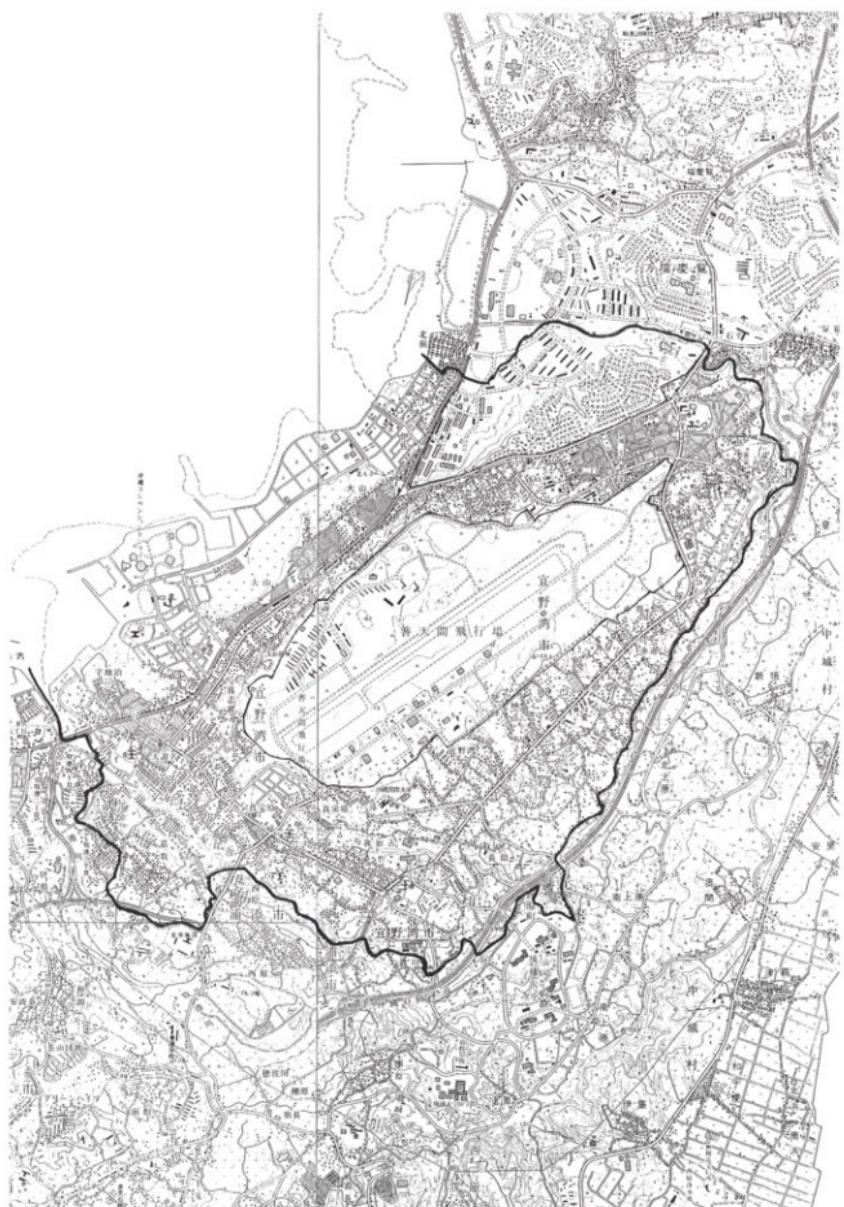
現状は第36海兵航空軍司令部の普天間航空基地隊によって管理運営され、沖縄に駐留する各部隊の後方支援活動体制をとっている。ヘリ部隊を中心として約70機の航空機が配備されている。施設内には格納庫、管理塔、整備・修理施設、兵舎、部品倉庫、事務所、消防署等の施設が配置されている。

2、キャンプ瑞慶覧 (Camp Zukeran) FAC6044

国道58号の東側および県道30号以北を囲み、本市の北側を占める。基地の範囲としては沖縄市、宜野湾市、北谷町、北中城村にまたがる広大な地域（約720ha）を占有する。つまり、キャンプ瑞慶覧の南西部が宜野湾市域で、後述のキャンプ・フォスター地区にあたる。この地域にはかつて字安仁屋、字普天間、字新城、字喜友名、字伊佐などが取り込まれ、とくに安仁屋集落は完全に基地の中に入っている。

本施設は在沖米海兵隊基地司令部のあるバトラー地区、第1962通信群及び米軍住宅が所在するプラザ地区、兵器・器材整備施設及び各隊舎が所在するフォスター地区から構成されている。昭和47年にキャンプ瑞慶覧、キャンプ・フォスターが統合され「キャンプ瑞慶覧」として提供施設となり、在沖米海兵隊の中枢として機能している。

施設内には兵舎、家族住宅、学校、消防署、郵便局、劇場、ボウリング場、教会等が建設されている。



第3図 宜野湾市の米軍基地の位置

(太線は市域の範囲)

第3章 普天間飛行場内の埋蔵文化財

宜野湾市教育委員会がこれまでに実施してきた基地内調査の成果から、普天間飛行場内には44箇所（表4）の埋蔵文化財が確認され、周知されている（平成10年1月現在）。確認されている遺跡の時代をみると縄文時代からグスク時代、さらに基地に攝取されるまえまで連綿と続き、古より居住地域として適していたことを窺わせている。

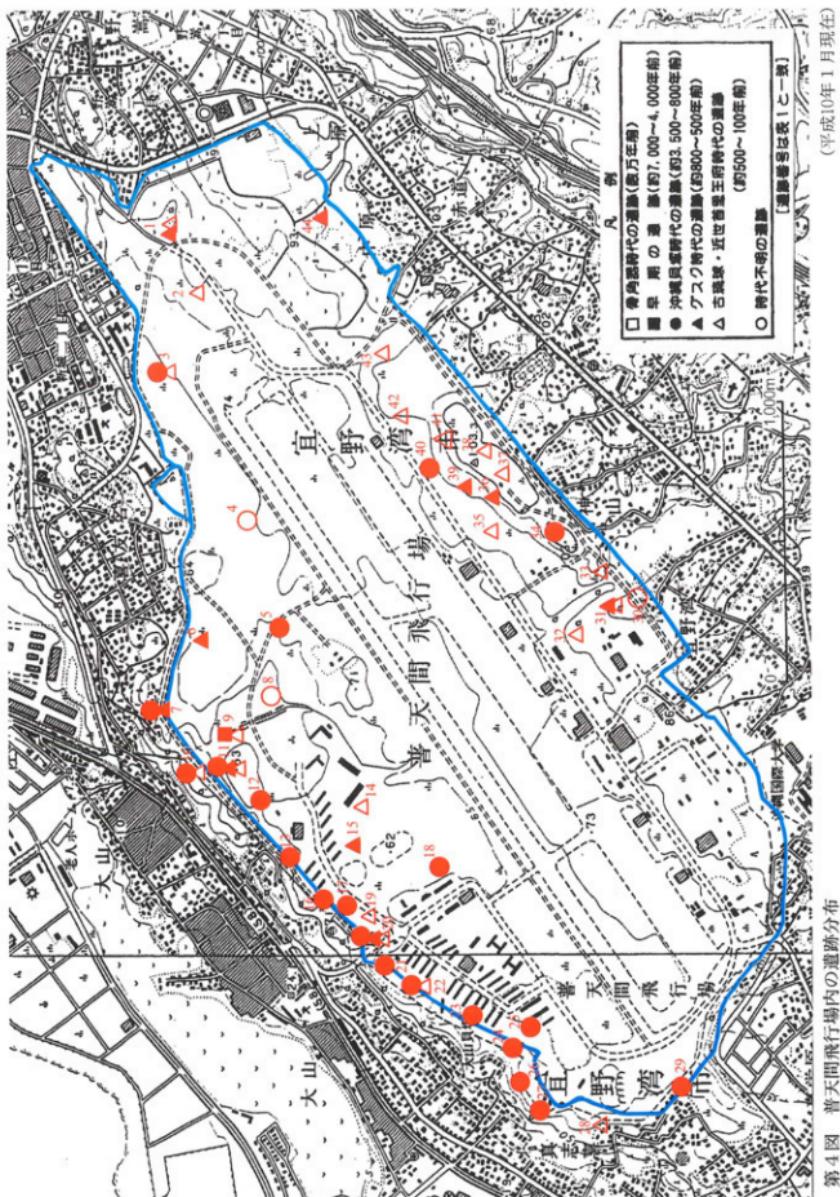
また、本基地内には遺跡・貝塚だけでなく、戦前からの拝所、湧泉、洞窟、石碑、古集落、古墓群、古闕牛場跡なども残っている。基地建設の際の土地の改変により破壊された文化財もあるが、その反面、基地の縁辺部の崖や谷間地域については基地内での開発から免れて緑地帯として残されており、旧来の地形の中に良好な状態で埋土保存されている埋蔵文化財も多いようである。その代表的なものに上原瀧原遺跡があり、また、沖縄のロゼッタストーンともいわれる「線刻石板」が出土した神山テラガマ洞穴遺跡、アジミー洞穴遺跡、真志喜富盛原遺跡、岳之佐久原第一洞穴遺跡、岳之佐久原第一遺跡、新城古集落遺跡、クシヌウタキ遺跡などが所在する。

上原瀧原遺跡は1993年に那覇防衛施設局が計画する米軍送油管の当該地への移設工事に伴う事前の試掘調査で確認されたものである。本遺跡はいまから約2800年前の沖縄貝塚時代中期（縄文晩期～弥生前期）の原初的な農耕地跡の可能性を有す遺跡として注目された。遺跡は旧谷底地形に形成されており、畝間状の溝が複数発掘され、畑跡の可能性が指摘された。検出された遺構の状態や堆積土の理科学的分析から、日本最古の畑跡の可能性があるとして注目された。現地保存が望まれる貴重な遺跡の一つである。

ところで、普天間飛行場内で現在までに確認されている44遺跡という数は、平成10年1月現在で確認されている市内145遺跡の約30%を占めている。しかし、この44遺跡という数は普天間飛行場縁辺地域だけのものであり、現在機能している滑走路部分や施設の周辺などは手付かずの状態のままである。つまり、普天間飛行場の大半の地域が未調査地区として残る状況での44遺跡であり、今後これら未調査地域の分布調査の進展によっては遺跡数が倍増あるいはそれ以上に増えてくるものと予想される。

また、基地のフェンスを隔てた、その周縁部においても、旧石器相当期の遺跡をはじめ、縄文・弥生・グスク、近世の各時期に至る遺跡が密集して分布している状況にある。本丘陵一帯が人間の居住空間として最適な環境にあったことを物語るものである。その要因として、琉球石灰岩の下部層に溜まった豊富な湧き水の確保と眼前に広がる東シナ海に珊瑚礁のリーフが発達したことにより、その礁湖内において豊富な魚介類が採捕できることから食糧の確保が容易であったことが考えられる。あるいは、上原瀧原遺跡で確認されたように、畑作の痕跡が検出されたことから、計画的な食糧生産の考え方方が存在した可能性も示している。

普天間飛行場内に分布する遺跡の中から、発掘調査が実施されている主要な遺跡について、その概要を紹介する。概要については宜野湾市教育委員会の承諾を得、同教育委員会発行の報告書を要約した。また、写真や図面などは各報告書から転載あるいは宜野湾市教育委員会から借用したものである。



第4図 普天間飛行場内の遺跡分布

1. 上原瀧原遺跡

普天間飛行場基地の北東縁に位置しており、一帯は標高66m内外のほぼ平坦地となっている。現況は原野と黙認耕作畑が広がっているものの、1948年連合軍司令部作成の地形図からすると遺跡地一帯は幅30~80mをもって北東~南西方向に300m余り延びる谷地形を形成していたようである。

1993年度に実施された発掘調査により、遺跡の谷底凹地には貝塚時代中期相当の農耕址と思しき遺構が、西側高まりの平坦地には同時代の遺物包含層が形成され、東側には広がらないことが判明している。堆積土は基本的に7枚認められ、第1・第2層は昨今の堆積土、第3~第5層(厚さ約3m)が農耕址と想定され、第3層は首里王府時代頃に、第4層は不明で、第5層が貝塚時代中期頃の層準のようである。第6層は時期不明、第7層が地山の赤土である。

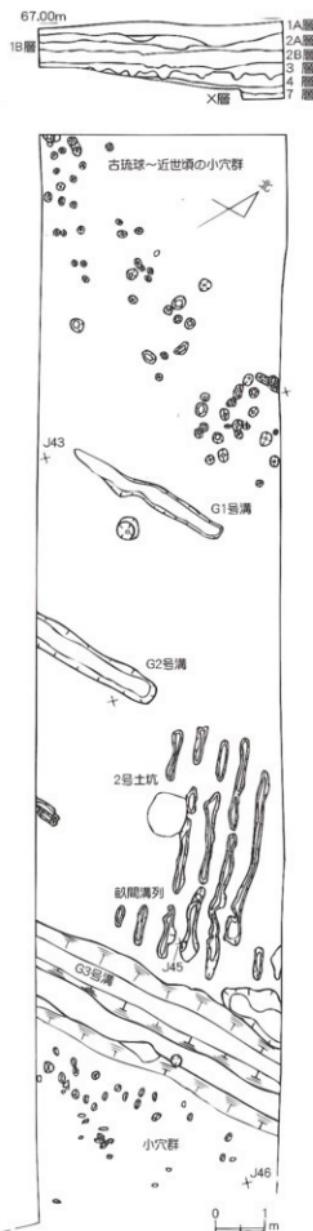
注目されたのは貝塚時代中期相当の第5層で検出された遺構、遺物の状況である。遺構は起点の軸線が同じで、同一方向に並ぶ溝で農耕址の耕作面と想定されている畝間状溝列、2基の土坑(用水池であろうとされる1号土坑、谷間の西側高まりで検出され貯蔵穴であろうとしている2号土坑)、用水溝とされる2条の溝、近接して谷間の東法面で検出された2面の焼土面などがある。

遺物は谷底最低面の1号土坑の傍らから出土した祭祀土器と考えられるものを除き、谷間の両法面と西側の高まりにほぼ限定され、その種類をみると土器が僅少で石包丁形石器や板状砥石それに不定形鍤状石器の種類が多く、同時期の集落址の遺物組成と異なることが指摘されている。出土遺物の炭素年代測定(1950年を起点)の結果、おおよそ3000年前頃の数値がでており、貝塚時代中期相当の時期の何らかの生産遺跡と把握すれば、検出された遺構は常年的な畑地と想定されるようである。原初的な農耕が貝塚中期まで遡る可能性を示す遺跡として今後も注意される貴重な遺跡のひとつである。



発掘調査地区全景

[東方より]



B地区の遺構平面・北西壁断面図

層位の説明

- 1 層：上位は石灰岩礁、下位は石灰岩礁とパラス混合の表土層である。
- 2 A層：褐色 ($Hue7.5YR^4/4$) のシルト土である。堆積土には焼土粒と灰化粒が僅かに混和する。
- B 層：褐色 ($Hue10YR^4/8$) の粘質土である。堆積土には焼土粒と灰化粒が僅かに混和する。下位面には遺構が形成される。
- 3 層：駄褐色 ($Hue7.5YR^4/3$) の粘質土である。堆積土には焼土粒と灰化粒が混和する。A地区 3 B層に相当し、下位面に遺構が形成する。
- 4 層：褐色 ($Hue7.5YR^4/4$) の粘質土である。焼土粒と灰化粒が僅かに混和する。貫入土が走る。
- X 層：褐色 ($Hue7.5YR^4/4$) の粘質土である。焼土粒と灰化粒が混和する。
- 7 層：褐色 ($Hue7.5YR^4/4$) の粘質土である。地山黄褐色土への漸移層である。4層からの貫入土が走る。



B地区の北西壁断面 [南東方より]



小穴群・用排水溝・試間溝検出状況 [南東方より]
(文献13より)

2. 大山岳之佐久原第一遺跡

普天間飛行場基地の西側、国道58号に沿うように東側を走る丘陵のやや内奥、標高52～60mを測る低平な丘陵凹地に位置している。本遺跡一帯は旧来の地形が良好に保存されており、洞窟遺跡（大山岳之佐久原第一・第二洞窟遺跡）や古墓等、貴重な文化財が残されている地域となっている。

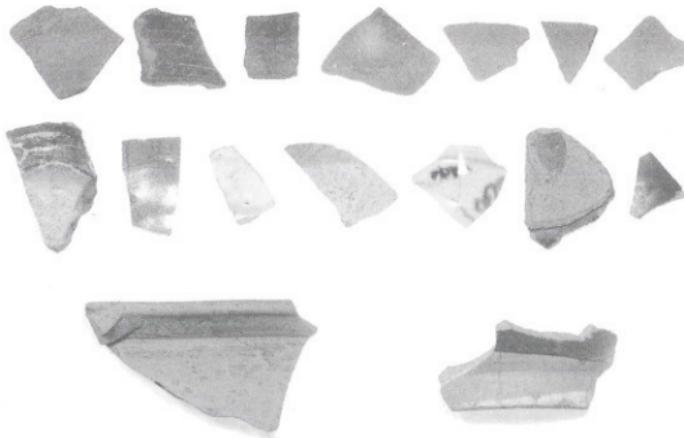
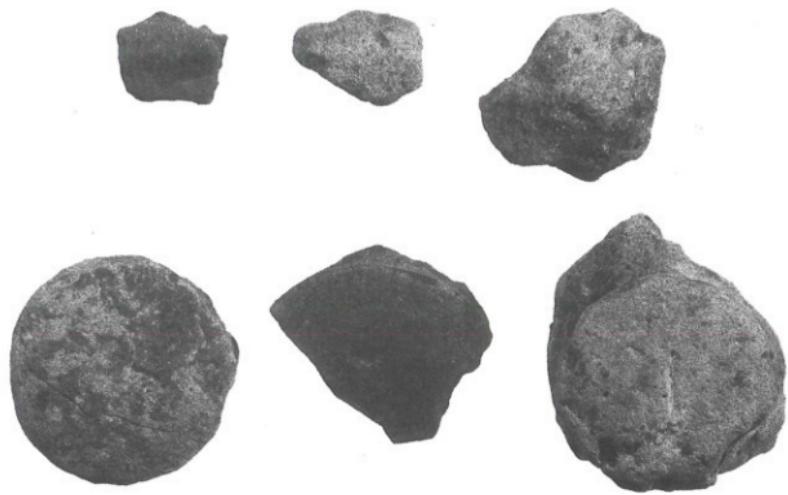
本遺跡は平成4年に送油管新設工事に伴う調査が実施されている。その結果、14に分けられる堆積層や、貝塚時代前期から近世に至るまでの遺物が出土していることなどが報告されている。堆積層はいずれも丘陵側からの流れ込みで、第1～第11層は焼土粒や炭粒が多少なり含まれる。その中で第2・第4・第7層は焼土粒や炭粒の多く混入する層であり、このような特徴的な堆積層が定期的に流れ込んでいる状況が把握された。

検出されている遺構も小穴群（91基）・石列遺構・円形の炉跡・3箇所の焼土面と5箇所の炭溜まり面などがみられ、いずれも土層に含まれる遺物から、沖縄貝塚時代中・後期からグスク時代の範疇に含まれるものとみられている。また、沖縄貝塚時代前期の土器も得られているが、その時代に相当する土層は明確にされていない。

出土遺物は土器、類須恵器、外来陶磁器、沖縄製陶器、石器などが認められるものの、ほとんどは小破片で摩耗している。第1～第7層に近世からグスク時代の遺物が含まれ、第8～第14層に貝塚時代相当の遺物が混在している。



遺跡全景 [北側より]



土器底部・類須恵器・外来製陶器・沖縄製陶器 (文献14より)

3. 新城古集落遺跡

普天間飛行場基地の北側、野嵩ゲート近くから普天間第二小学校一帯に広がり、標高74mほどの石灰岩丘陵上に立地している。古くから新城集落の住民の大半が幾世代かに亘って延々と生活してきた場所であり、基地として接収される以前の新城集落が位置していた場所である。遺跡地近くにある洞穴を掘り込んで造られたアラグスクガー湧泉に寄贈された香炉の形状などからすると、集落の設立年代は1770年代よりそう古くない頃と考えられる。また、地籍図からみると、近世琉球王府時代にできた計画的な碁盤目型集落であることが想定される。

戦後の基地接収により旧来の地形が失われ、古い集落跡の位置を知ることはできない。僅かに滑走路手前に屋敷の擁護木と屋敷囲い等の石垣などがみられ、かつての様子を窺わせているのみである。

米陸軍の送油管敷設工事に伴い、野嵩ゲートから普天間第二小学校へと西側へ僅かに傾斜する基地内監視道路に沿った南側部分の約1000m²の発掘調査が実施されている。その結果、検出された小穴、土坑、溝状遺構、石列、集石遺構、掘り抜き井戸などの遺構が発掘区の西側に集中的に認められたことから、遺跡の中心部は今回の調査区の西側になる可能性が示されている。さらに、西側部分で検出されている遺構の中で、交差するような方向に向いているものがみられることから、地籍図にみられる琉球王府時代に行なった碁盤目型集落の可能性を示唆するものかと想定されている。

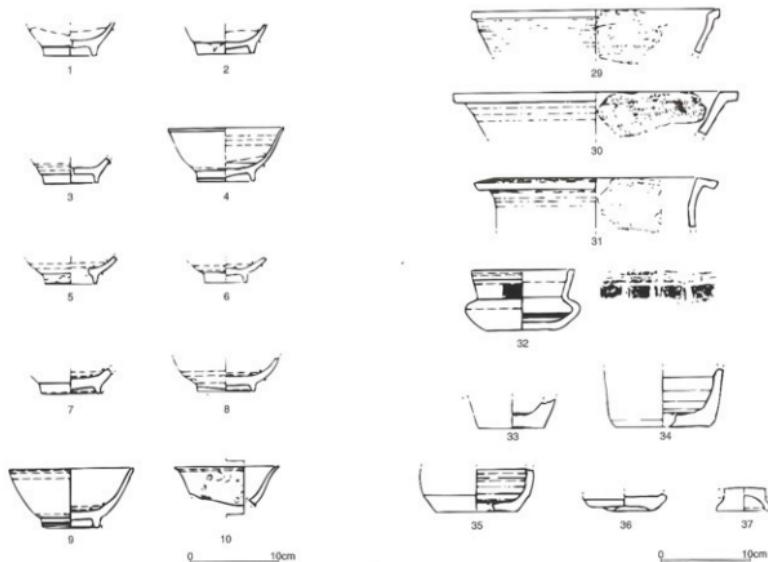
出土遺物は沖縄製陶器が大半を占める。その他17・18世紀頃に位置付けられる中国製の染付けや石器、貝製品、煙管、硯、円盤状製品などがある。「新城」銘入りの陶器は宜野湾市で初めての銘入り陶器として注意される資料としている。



遺 跡 全 景 [東北側より]



遺跡全景 [東北側より]



出土陶器

[文献14より]

4. 宜野湾クシヌウタキ遺跡

普天間飛行場基地の東縁、標高90～100m程の高位段丘面の丘陵地とその西麓をなす緩傾斜地に位置している。丘陵地は約25mの幅をもって北西～南東方向へ鞍状に約120m程延びている。丘陵上面は平場をなして基盤の琉球石灰岩が剥き出しの状況にあり、旧宜野湾同村が管掌する拝所が位置している。丘陵地の東辺は落差7m余りの崖面が取り巻き、その前面を小河川（シリガーラ）が北西方向に流れている。崖面には後原洞穴（仮称）やカニクエーウマヌヤー洞穴、宜野湾・神山シリガーラ古墓群と称する古墓が散在する。また、丘陵地の西麓に展開する標高93m内外の緩傾斜地は、地山の明黄褐色土が覆土する開地であるが、その縁辺は米軍関連施設の建設のために掘削されている。

本遺跡は在沖米軍海兵隊基地の構成員による石祠の棄損行為の事後措置として行なわれた東西の石祠の復元工事に伴い、発掘調査が実施されている。調査にあたっては御嶽の拝所地をⅠ地区、西側の緩傾斜地をⅡ地区として実施し、かつての調査により遺物の散在や小貝塚が確認されている東側崖下をⅢ地区としている。調査の結果、Ⅰ地区およびⅡ地区ともグスク時代から近現代に相当する遺構や遺物が確認されている。

Ⅰ地区は出土陶磁器から14世紀後半～15世紀中葉を主体とするⅠ期、17世紀中葉から18世紀前半頃に始まり明治末年に至るⅡ期、東祠と西祠の建造年代である明治末年（1910年頃）から沖縄戦を経て現代に至るⅢ期の3期確認されている。Ⅱ地区は出土陶磁器から14世紀後半～15世紀中葉の時期とされ、検出された堀を柱建物の柱穴とみられる遺構などから、集落址であろうとしている。Ⅲ地区は古老により鍛冶伝承があることやⅠ・Ⅱ地区的状況などから、詳細な調査が待たれる場所としている。

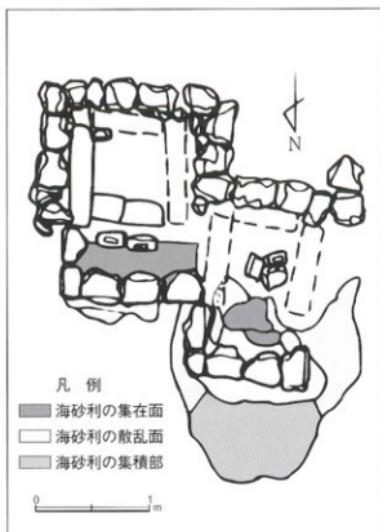


遺跡近景：1989年撮影

[南東から]



東祠・1号海砂利敷遺構の土層断面 [北方から]



海砂利敷遺構実測図

(文献12より)



2号海砂利敷遺構の集在面と集積部

[北方から]

第4章 キャンプ瑞慶覧内の埋蔵文化財

先述したように宜野湾市、沖縄市、北谷町、北中城村にまたがる広大な面積を有する同基地の南西部が宜野湾市に入る。宜野湾市からみれば市の北西部、国道58号と県道30号に挟まれた場所となっている。県道30号付近までは普天間、新城、喜友名の各部落が展開する台地の広がる範囲であるが、その北側(基地内)では急な断崖をなし、そこから緩やかな傾斜地がひろがり、国道58号側に展開する沖積低地(かつての北谷ターブックワ)、東シナ海へと続く。

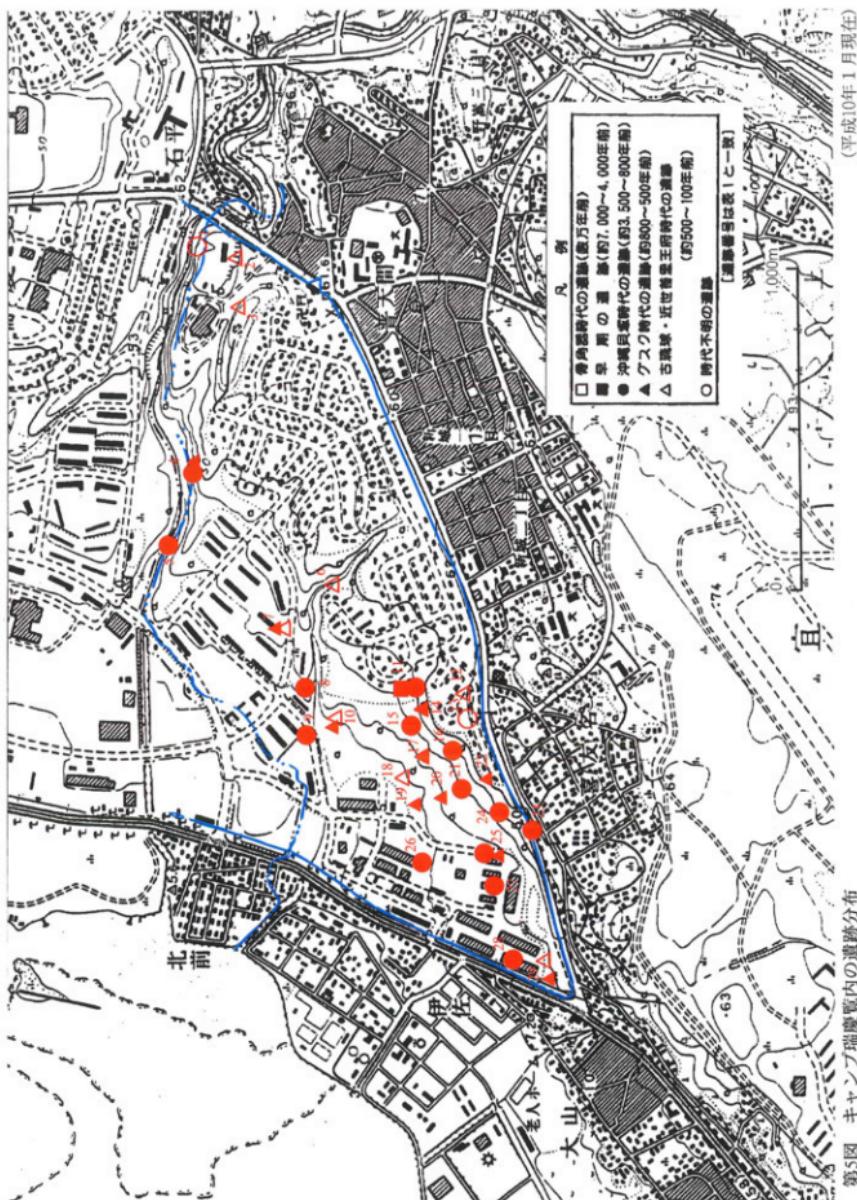
キャンプ瑞慶覧基地内の宜野湾市域には現在30箇所の埋蔵文化財(遺跡や古墓群など)が確認されている(表)。これらの遺跡の約半数が1981~1982年にかけて宜野湾市教育委員会が行った分布調査で確認されている。その調査で現在の集落が展開する台地の北側縁辺一帯に10箇所、新城下原一帯に3箇所の新発見の遺跡が確認され、既に知られている2遺跡と基地外に分布する4遺跡を合わせた19遺跡が喜友名遺跡群として把握されている。遺跡群の半数が確認されている台地縁辺の麓部には国指定のウフガー・カーグゥを含む7つの湧泉(ナナスカー)が知られており、その南側に広がる低地にはこれらの湧泉を利用した生産遺跡の存在も想定されている。

これらの遺跡の時代をみると、縄文時代~グスク時代を経て基地接收前までのものがみられ、普天間飛行場の場合と同じように永い期間に亘って連続と居住空間となっていたことが窺える。

キャンプ瑞慶覧基地内においても普天間飛行場基地と同様に、現在可動している施設や住宅地などとの関係で文化財分布調査が実施されていない地域も多く残されている。これまでに実施してきた調査の成果は、まだまだ多くの文化財が埋もれていることを予想させるに十分な成果であり、未調査地域の調査が進めば遺跡数はさらに増加していくものと予想される。



喜友名遺跡群遠景 [北方より]



1. 安仁屋トゥンヤマ遺跡

県道30号から北へ約500m、国道58号から東へ約750mのところにあり、キャンプ瑞慶覧基地の宜野湾市域北側に位置している。舌状に突き出した標高42mほどの丘陵の高まり（かつての安仁屋部落の拝所である殿山ないしは御嶽山と呼ばれる）一帯に形成されたグスク時代の遺跡である。丘陵の南側を流れる小河川（イシジャー）に面する崖下には按司墓などの古墓が多数みられ、また、海産の具殻が集在する小貝塚も確認されている。

平成2年度に兵舎建設工事に伴う緊急発掘調査が沖縄県教育委員会により実施されている。調査地は殿山の北側、集落（フルヤシチ）があったとされる場所である。調査の結果、発掘区の北側に近世の時期の堆積層が、南西側ではその下部にグスク期の堆積層が確認されている。地山面の傾斜および堆積層の傾斜などから一帯は丘陵の中腹あたりになると推察されている。また、最下層のグスク期の層が傾斜に沿って南西側に厚く堆積していることから、最初の集落はトゥンヤマの西側一帯に形成されていたものと想定されている。

発掘区北側は近世期の堆積層の下は地山の赤土になり、その面に柱穴群が検出されている。また、北側から階段状になっており、南側の下段部は斜面を削って平場造成している。段の部分には石灰岩礫を配し土留めとしていることなどが判明している。

出土遺物はバラエティに富んでおり、中国産の青磁・白磁・染付・褐釉陶器・緑釉・三彩・瑠璃釉・タイ産の鉄絵陶器、本土産陶磁器、須恵器、グスク系土器、滑石製石鍋の破片、円盤状製品、石器などがみられる。中国産や本土産の陶磁器からすると本遺跡は14世紀以降に定着してきたようで、17・18世紀頃にそのピークがあったかと想定されている。



発掘区近景（左後方はトゥンヤマ）

[北側より]

2. 喜友名山川原第5遺跡

キャンプ瑞慶覧基地内普天間・ハウジングの建つ丘陵台地の西側の縁、県道30号の北側約200mにあるヤファレーグーフーと呼ばれる標高56mほどの小高い丘に位置している。一帯は北側へ急斜面をなし、西側には4mほどの崖をつくる石灰岩地帯である。この小高い丘の500m²余りが宜野湾市教育委員会により発掘調査されている。その結果、丘の頂上のむきだしの琉球石灰岩の隙間や北側崖下の岩陰、西側崖下の全域に沖縄貝塚時代前期の土器が堆積することがわかり、また、後2者の地点では沖縄貝塚時代中期の遺物も出土している。

本遺跡は岩陰を利用した古墓群と重複しており、沖縄貝塚時代当初の堆積層を完全に残すのは第3号墓と呼称する墓の前庭部だけであり、他の地点は攪乱を受けていることが判明している。しかしながら、出土している遺物は注目されるものが多く、次の3点が大きな成果としてあげられている。

- ① 丘陵西崖下の攪乱土から宜野湾市で最古の室川下層式土器が出土。
- ② 第15号墓と呼称する自然の岩陰の中から鮫の歯を模造した2点の貝製垂れ飾りが、他の有孔貝製品や人骨と一緒に出土している。
- ③ 貝塚時代前期の伊波式・荻堂式・大山式土器、また、貝塚時代中期のカヤウチバンタ式などの肥厚口縁土器がイヌやイノシシなどの獣骨骨類や貝類と一緒に多く出土しており、中には奄美に由来する土器もみられる。

3. 喜友名山川原古墓群

キャンプ瑞慶覧基地内の普天間ハウジングの建つ丘陵台地北側縁の急峻な斜面ないし断崖に形成されている古墓群の総称で、ヤファレーグーフーと呼ばれる丘陵台地の突出部に25基（ヤファレーグーフー地区の古墓群）、その地区より南側の丘陵斜面ないし断崖地に6基（山川原西方丘陵の周縁古墓群）の31基が確認されている。その中のヤファレーグーフー地区の古墓群の緊急調査が宜野湾市教育委員会により実施されている。

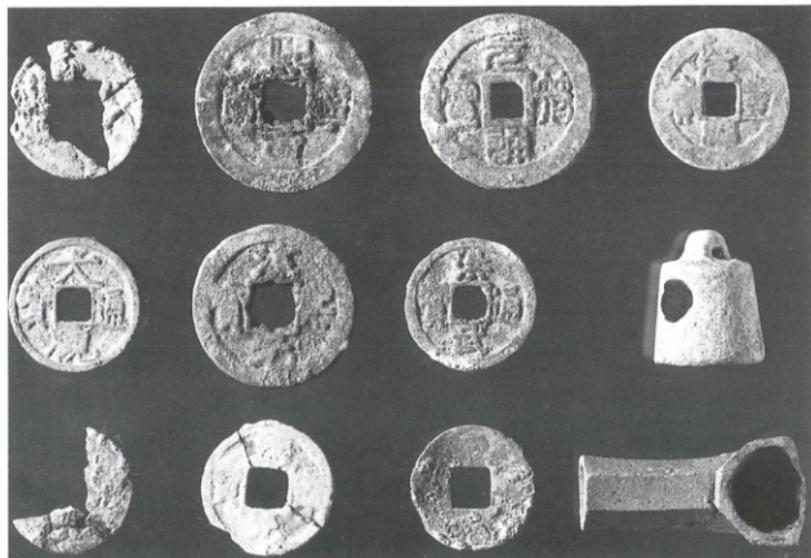
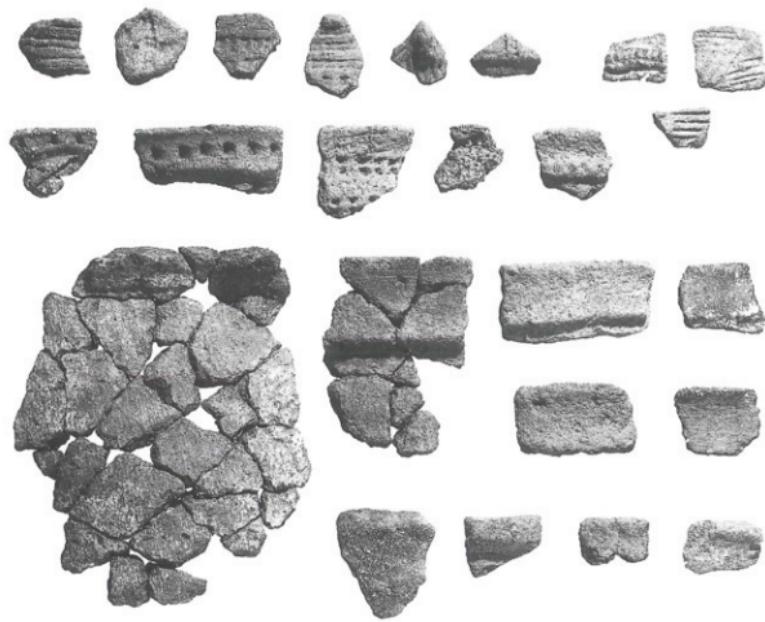
25基の古墓はヤファレーグーフーと呼ばれる丘陵台地の北側斜面および西崖下に雄塙状に散在して確認されている。調査の結果、墓口が切り石積みのものや野面石積みのもの、基盤の琉球石灰岩を掘り込んで造作されたものなどがあり、また、出土遺物も朱書き銘のある綠釉陶器片、錢貨、種々の蔵骨器、急須・盃・瓶子などの沖縄製陶器、石製や陶製の煙管の雁首など多岐におよんでいる。これら古墓の形状と出土遺物などから第15号墓が沖縄貝塚時代、第5号墓が古琉球に遡るほかは、大半の墓が近世期の所産であることが判明している。



喜友名山川原第5遺跡 遠景 [北西方より]



喜友名山川原古墓 全景 [北方より]



上：山川原第5遺跡出土土器 下：古墓群出土遺物

4. 喜友名山川原第6遺跡

キャンプ瑞慶覧基地内の普天間ハウジングが建つ丘陵の北側縁、同第5遺跡の西側約100mのところに位置している。その一帯は標高30~45mほどで、北側に傾く緩やかな斜面になつており、基盤の琉球石灰岩の露頭が散見される。この地域はアラジモーとも呼ばれ、戦前までは喜友名部落の屋根の葺き替え茅を採る場所であったが、戦時中は日本軍の陣地壕、戦後は米軍の演習場になっていたようである。

本遺跡は宜野湾市教育委員会により約350m²の範囲で緊急発掘調査が実施されている。その結果、発掘範囲の南西側においてグスク時代の遺物包含層（未搅乱）が確認されている。その遺物包含層から出土している土器や類須恵器、中国製白磁などから、グスク時代前葉期に形成された遺跡であることが判明している。この時期の類例遺跡はそれほど多くないので、今後の調査が期待される貴重な遺跡のひとつである。調査の成果として、以下の3点があげられている。

- ① 日本国の滑石製石鍋を模倣した鍋・羽釜形の煮沸土器、碗・壺形の土器、古色の類須恵器壺、中国製白磁碗など、グスク時代の前葉期（13世紀頃）の生活用具の形式の組合せを窺い知ることができる。
- ② 滑石製容器とその関連（削り技術や器形など）が暗示される。
- ③ 本遺跡の立地環境や武具である鉢（鎧の止め金）の出土など、グスク論争（グスク遺跡は「支配者の居城・居館」か「防御された古代集落」なのか）を考えるうえで興味深い。



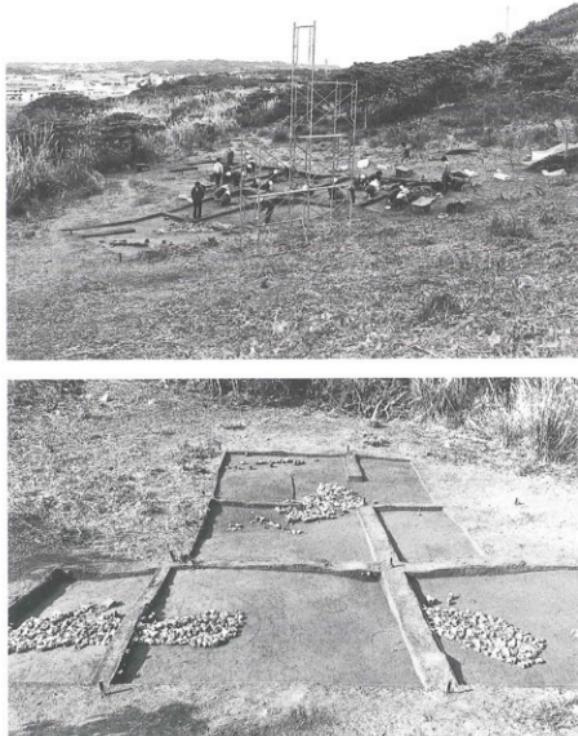
喜友名山川原第6遺跡 近景 [西方より]

5. 喜友名山川原第7遺跡

キャンプ瑞慶覧基地内普天間ハウジングの西端部北側の丘陵崖から約100m北側の平坦地(標高約26m)にあり、喜友名山川原第6遺跡の西方約100mに位置している。一帯はヤマガーモーと呼ばれており、遺跡の西側にはヤマガーフラのびる迫地が広がる。東方は遺跡を取り巻くように比高3mほどの高まりが廻る。喜友名部落の戦前の茅場のひとつで、旧地形が残っている場所である。

本遺跡は宜野湾市教育委員会により172m²の範囲で緊急発掘調査が実施されている。調査の結果、表土下は直接地山の赤土になるが、その面で2基の敷石遺構、溝状遺構、石壙遺構、柱穴群などの遺構が良好な状態で検出されている。第1号敷石遺構の炉址や溝状部から出土している土器や中国製の青磁などから、検出された遺構群の時期は概ねグスク時代の後葉頃と想定されている。

また、これらの遺構群の周辺や敷石上面からは日常汁器などがほとんど得られておらず、そのことを考慮して何らかの生産や祭りの場などの可能性も指摘されている。さらに、遺跡東北側の高まり部の地山(赤土)中より出土したリュウキュウムカシキヨンの化石骨片が注意されるとしている。



上：遺跡近景 下：敷石遺構検出状況

表4. 普天間飛行場内の遺跡一覧

番号	遺 跡 名	概 要 な ど	保 存	文 献
1	野嶺タマタ原遺跡		○	9
2	新城古集落遺跡		○	8・13
3	上原瀬原遺跡		○	9・12
4	喜友名東原第二遺跡			
5	喜友名アジミ一洞窟遺跡	約2,000年前の土器が出土。	○	7・8
6	喜友名ウフシー遺跡	貝類・青磁を採集。	○	8・9
7	伊佐上原遺跡群	約3,000～2,000年前の土器やグスク時代の遺物も出土。	○	8・9
8	喜友名前原第二遺跡			
9	大山岳之佐久原第一洞窟遺跡	墓処。戦時資料散布。	○	8・9
10	大山岳之佐久原第三遺跡			
11	大山岳佐久原第一遺跡		○	8・9
12	大山岳之佐久原第二遺跡	約2,500年前の土器が出土。	○	8・9
13	大山ウォーラー遺物散布地	約2,500年前の土器が出土。	○	8・9
14	大山加良当原遺跡	墓地造成により削平されている。	×	8・9
15	宇久保原第二遺跡			
16	宇久保原第一遺跡			
17	大山チャシグスク遺跡		○	8・9
18	大山勢頭原第三遺跡（仮称）		○	
19	大山東方丘陵古墓群			
20	大山マヤガマ第二洞穴遺跡			
21	大山勢頭原遺跡			
22	大山勢頭原第二遺跡		○	8・9
23	大山富盛原第一遺跡	約2,500年前の土器が出土。	○	8・16
24	大山富盛原第二遺跡	約2,500年前の土器が出土。	○	8・9
25	大山富盛原第三遺跡			
26	真志喜遺跡			
27	真志喜富盛原第一遺跡	約2,500年前の土器が出土。	○	8・9
28	製立原古墓群			
29	大謝名久永地原遺物散布地	約2,500年前の土器が出土。	○	8・9
30	後原遺物散布地		不 明	4・9
31	宜野湾クシヌウタキ遺跡	グスク時代の遺跡。	○	8・9
32	宜野湾古集落遺跡		○	
33	宜野湾シリガーラ流域古墓群		○	8・9
34	神山カソミン遺跡		○	8・9
35	神山古集落遺跡			
36	神山原遺跡		○	9
37	神山テラガマ洞穴遺跡	線刻画された石製品を採集。	○	8・9
38	神山ウクマバカ洞穴遺跡	約2,000～3,500年前の土器片が出土。	○	8・9
39	神山トゥン遺跡		○	9
40	赤道渡呂寒原洞穴遺跡		○	9
41	神山後原丘陵古墓群		○	8・9
42	赤道渡呂寒原古墓群		○	8・9
43	赤道シキロー流域古墓群		○	8・9
44	上原遺跡		○	9

※ 保存状況：○=良好 △=半壊 ×=全壊 不明=確認できていないもの

表5. キャンプ瑞慶覧内の遺跡一覧

番号	遺 跡 名	概 要 な ど	保 存	文 献
1	普天間後原遺跡	グスク時代の遺跡と思われる。	○	8・9
2	普天間カンジャースウイー古墓群	1982年に米軍隊舎建設の計画があったが、移設された。	○	8・9
3	普天間フィールー丘陵古墓群	岩陰墓・石積墓。	○	8・9
4	普天間グスクンニー遺跡	約2,600～2,000年前の遺跡。貝類や土器が出土。	○	4・9
5	普天間下原洞穴遺跡	約2,000～800年前の遺跡。貝類や土器が見られる。	○	8・9
6	安仁屋・新城イシジャー流域古墓群	120基前後の古墓群。	○	8・9
7	安仁屋トゥンヤマ遺跡	グスク時代の遺跡。	○	8・9
8	新城下原遺跡	約3,500～3,000年前。土器・石器・骨製品など。 近世の古墓群もある。	○	5・8
9	新城下原第二遺跡		○	8
10	新城下殿遺跡	グスク時代。土器・離頭鉛状骨製品出土。	○	5・8
11	喜友名山川原第五遺跡	約5,000～2,000年前の貝塚。土器・獸魚骨出土。 25基の古墓。	○	5・8
12	喜友名山川原丘陵古墓群	31基の掘込み墓。	○	8・9
13	喜友名フトウキャップ洞穴遺跡			
14	喜友名山川原第六遺跡	約800～500年前の遺跡。13世紀頃の生活用具や 交易品が出土。	○	5・8
15	喜友名山川原第四遺跡	約2,500～2,000年前の遺跡。土器・石器などが出土。	○	5・8
16	喜友名山川原第二遺跡	約2,500～2,000年前の遺跡。土器・石材出土。 道路建設で破壊。	○	5・8
17	喜友名山川原第七遺跡	約800～500年前の遺跡。敷石・炉・柱穴検出。	○	5・8
18	喜友名古水田跡	苗代用の旧耕作田跡。	○	8・9
19	喜友名下原第二遺跡	泉（バシガ）を中心とする。グスク時代の遺跡。	○	8・9
20	喜友名西原遺跡	グスク時代の遺跡。掘込み式の亀甲墓がある。	○	5・8
21	喜友名山川原第三遺跡	約3,000～2,500年前の遺跡。仮設道路建設で一部破壊。	○	5・8
22	喜友名グスク遺跡	グスク時代の土器・輸入陶磁器出土。加藤三吾氏により 調査された(1990)。道路・ハウジング建設により破壊。	×	5・8
23	喜友名貝塚	約3,500～3,000年前の遺跡。土器・石器・須恵 器などが出土。	○	5・8
24	喜友名山川原遺跡	約3,500～3,000年前の遺跡。土器・貝類・獸魚 骨。風葬墓あり。	○	5・8
25	喜友名下原遺跡	約1,500～800年前の遺跡。	○	5・8
26	伊佐後原第二遺跡		○	9
27	伊佐後原第一遺跡		○	9
28	伊佐前原第二遺跡		○	17
29	伊佐前原第一遺跡		○	17

※ 保存状況：○＝良好 △＝半壊 ×＝全壊 不明＝確認できていないもの

第5章 おわりに

以上、宜野湾市所在の米軍基地（普天間飛行場、キャンプ瑞慶覧）内で確認されている遺跡の分布状況（平成10年1月現在）や発掘調査が実施された主要遺跡の概要について簡記した。平成8年1月に勝連町にある米軍基地「ホワイトビーチ地区」内で、周知の埋蔵文化財である平敷屋原遺跡が米空軍の気象観測用レーダー建設工事により破壊されたことが契機となり、基地内に所在する文化財の取り扱いが俄に注目された。

他方、沖縄県の「国際都市形成構想」の策定、それに伴う「基地返還アクションプログラム」の提示、さらに、日米安全保障協議委員会で「沖縄に関する特別行動委員会」（SACO）の最終報告が承認され、普天間飛行場の全面返還を含む10施設の返還が合意された。このような大きな変動の中、基地返還、その跡地利用計画が目前に迫り、基地内に所在する文化財の把握が緊急課題として浮上してきた。特に、基地返還後の跡地利用計画との関わりが大きいとみられる埋蔵文化財について、その分布状況や範囲などを示した分布図の作成を早急に行う必要があり、今回の調査になった。

これまでに実施されてきた基地内関係の調査データの整理および未調査地区における試掘調査の実施とその成果の蓄積が主目的である。SACOの最終報告や県の返還アクションプログラムのスケジュールなどを勘案しながら、県内の米軍基地内の埋蔵文化財分布調査を実施していく予定である。初年度の平成9年度は全面返還が合意された普天間飛行場のある宜野湾市からのスタートとなった。

本報告書では宜野湾市教育委員会がこれまでに実施した普天間飛行場、キャンプ瑞慶覧基地内の調査成果を中心まとめ、普天間飛行場およびキャンプ瑞慶覧基地内（宜野湾市域）の現時点での埋蔵文化財の分布状況や主要遺跡の概要などを紹介した。

基地内という特殊地域での調査であり、通常の調査のようにいかない部分も多く、現地調査を実施していく際の課題点もある。しかしながら、基地返還後の跡地利用計画も迫っており、関係部局との調整、また当該市町村教育委員会の協力などにより調査のスムーズな進行を図っていきたい。



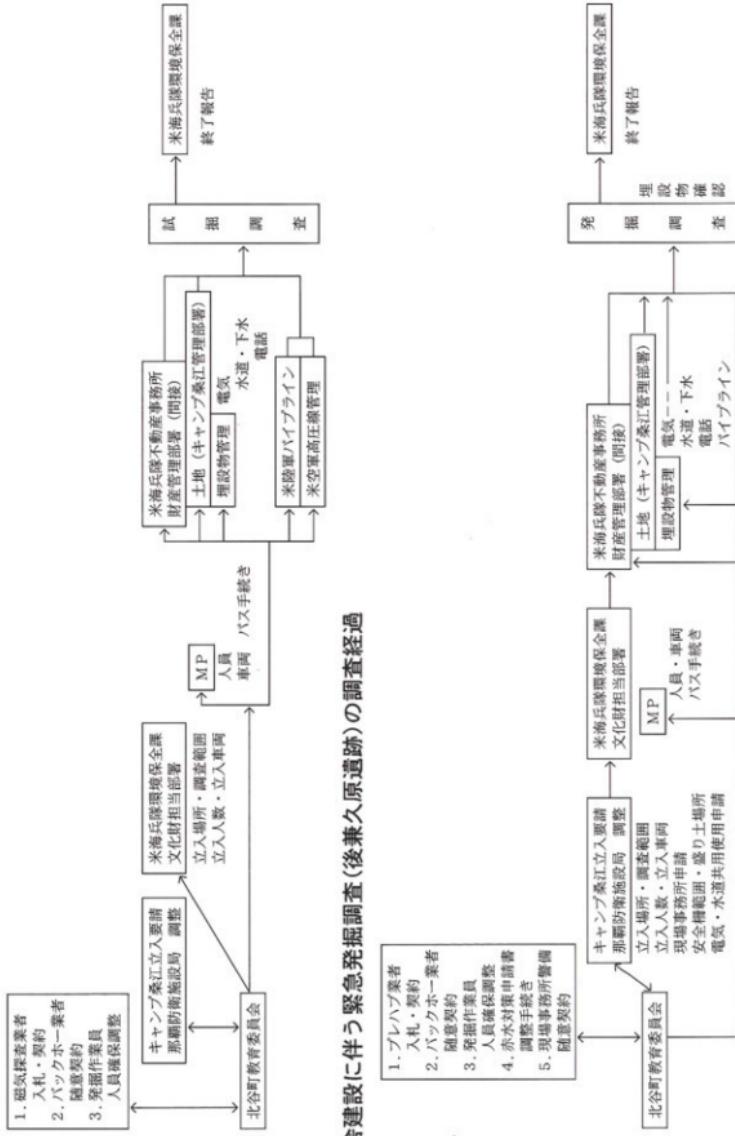
普天間飛行場 [西方より]

表6表. 基地内関係文献一覧

番号	シリーズ名・ナンバー	題名	発行年	発行
1	昭和54年度 文化財行政要覧	V 調査報告 第2回 米軍基地内文化財調査報告	昭和55年3月	沖縄県教育委員会
2	宜野湾市文化財調査報告書 第3集	キヤンブ・ズケラン基地の文化財	昭和56年1月	宜野湾市教育委員会
3	昭和55年度 文化財行政要覧	第3回 米軍基地内等文化財調査報告	昭和56年3月	沖縄県教育委員会
4	宜野湾市文化財調査報告書 第4集	宜野湾市の遺跡	昭和57年3月	宜野湾市教育委員会
5	沖縄県文化財調査報告書 第53集	ぐすく グスク分布調査報告 I —沖縄本島及び周辺離島—	昭和58年3月	沖縄県教育委員会
6	宜野湾市文化財調査報告書 第5集	喜友名遺跡群	昭和59年3月	宜野湾市教育委員会
7	宜野湾市文化財調査報告書 第6集	洞穴	昭和59年3月	宜野湾市教育委員会
8	宜野湾市文化財調査報告書 第10集	土に埋もれた宜野湾市	平成元年3月	宜野湾市教育委員会
9	宜野湾市文化財保護資料 第36集	宜野湾市文化財情報図	平成 3年3月	宜野湾市教育委員会
10	宜野湾市文化財調査報告書 第16集	上原同原遺跡の発掘調査記録	平成 4年3月	宜野湾市教育委員会
11	沖縄県文化財調査報告書 第105集	安仁屋トゥンヤマ遺跡 —下級下仕官隊舎建設に伴う緊急 発掘調査報告—	平成 4年3月	沖縄県教育委員会
12	宜野湾市文化財調査報告書 第20集	宜野湾クシヌウタキ	平成 6年3月	宜野湾市教育委員会
13	宜野湾市文化財保護資料 第43集	上原瀧原遺跡発掘調査記録	平成 7年3月	宜野湾市教育委員会
14	宜野湾市文化財調査報告書 第31集	大山岳之佐久原第1遺跡・新城古 集落遺跡	平成 7年3月	宜野湾市教育委員会
15	宜野湾市文化財保護資料	宜野湾市の基地内文化財	平成 8年4月	宜野湾市教育委員会
16	文化財調査報告書第22集	大山富盛原第1遺跡	1996年3月	宜野湾市教育委員会
17	文化財保護資料第44集	伊佐前原第一・第二遺跡	1996年3月	宜野湾市教育委員会
18	宜野湾市文化財調査報告書 第25集	宜野湾クシヌウタキ	平成 9年3月	宜野湾市教育委員会
19	沖縄の米軍基地			沖縄県総務部知事 公室基地対策室

基地内文化財取り扱いにおけるフローチャート（北谷町例）

伊礼原B遺跡ほか発掘調査の経過（文化庁補助）



庁舎建設に伴う緊急発掘調査（後兼久原遺跡）の調査経過

基地内文化財 I

～宜野湾市所在米軍基地内埋蔵文化財分布調査概要～

印 刷	1998年3月25日
発 行	1998年3月31日
発 行	沖縄県教育委員会
編 集	沖縄県教育庁文化課
〒900-8571	那覇市泉崎1丁目2-2
T E L	098-866-2731
F A X	098-867-4350
印 刷	有限会社 若葉印刷
〒900-0024	那覇市古波藏339番地
T E L	098-834-3429
F A X	098-853-1423

